

---

# 紅眼の騎士

霧野ミコト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

紅眼の騎士

### 【Nコード】

N0025D

### 【作者名】

霧野ミコト

### 【あらすじ】

あらゆる面で完璧な兄が居た。それゆえに、弟は、絶望した。絶望しながらも、それでも、歩み続けた。苦しみながらも、歩み続けた。これは、そんな貴族の騎士の物語。

## 前篇

「右の者に勲一等及び近衛の統する任を命じる」

たくさん臣下のいる謁見の間にて、王がそう告げる。

このたびの戦乱の功労者に、その偉業を称えての褒賞だった。

そして、その功労者こそ…

この僕の兄だった。

兄が近衛騎士団の団長に就任したのがちょうど八年前。

当時、16歳の時の事で、史上最年少での就任だった。

そして、そのときの僕は10歳になるかならないかのころだった。

兄は昔から優秀だった。

一度父親に剣を習えば、一年でマスターし、数年でこの国、いや大陸一の剣の使い手となった。

そして、魔法を習えば、基礎などすっ飛ばし、たった三年で、現存する魔法を覚えてしまった。

今では新しく魔法を生み出すくらいだ。

そんな兄のことを回りははじめは化け物と呼び、次に神の堕とし子と呼ばれるようになった。

畏敬の念をこめて。

そして、僕はそんな兄を、誇りに思いつつ、疎んでいた。

兄は優秀すぎた。

そして、僕は凡庸すぎた。

光り輝きすぎる才能は僕という個を打ち消した。

どんなにがんばっても認められることはなかった。

学校で優秀な成績を出しても。

剣の大会で優勝しても。

新しい魔法を覚えても。

認められなかった。

それが当然だから。

天才の弟である僕はそれができて当然なのだ。

そして、できなければ、文句を言われる。

なぜ、兄のようにできないのか、と。

僕は僕で、兄は兄。

そのはずなのに、誰もそのことをわかってくれない。

けれど、それももうあきらめていた。

期待してもどうにもならない。

求めてみたところでどうにもならない。

絶望しか目の前にはない。

「また、貴方の兄が、手柄立てたんですって？」

不意に場面が変わる。

目の前に、少女が現れる。

少女の名前は、ルナ「ワルクユーレ」オルガルドズム。

いや、そんなことはいい、彼女は、最初からいたんだ。

ただ、僕が……

私が、考え込んでいたから、存在を忘れていただけ。

だが、これでは、だめだ。

また、父に説教をもらう羽目になる。

護衛中に考え事をして、周りのことをおろそかにするようでは、護

衛の意味がない。

そう、私は、目の前にいる少女の護衛を任されている。

金色の腰まで届くウェーブのかかった髪に、サファイアのようなブ

ルーを埋め込んだ瞳をした少女。

彼女が私の護衛相手で、主君。

そして、それと同時に……

この国の唯一の王位継承者。

つまり、彼女がこの国の王となる。

まあ、実際は、結婚相手がそうなるだろう。

「そうですね。確か、今回は、北の境界線防衛戦の予定です」

それは、さておき、返答をしておく。

こたえなければ、機嫌を損ねられて、暴れられることがある。

彼女の護衛をまかされて、早二年。

彼女の性格はおおよそ熟知しているつもりだ。

「さすが、と言った所かしらね。被害を少なく、その上で決定的な勝利をつかむ。まさしく、天才ね」

そんな彼女も、やはり例に漏れることなく、私の兄を思う女性の一人だった。

当然だ。

若くして近衛騎士団の団長になり、国王からの信頼も厚く、おまけにそれに奢る事無く真摯な態度で振舞う青年貴族。

誰もがその人の事を思うだろう。

けれど、実際は、誰も兄には近づかない。

いや、近づけないというほうが正しいか。

何せ、兄には婚約者がいる。

しっかりとした、手続きのほうはとられていないが、すでに宮廷でもうわさになっている。

そう、兄が次の国王に、つまり、私の主君である彼女と結婚することが。

「そうですね」

そして、彼女はそれを拒む気などないだろう。

兄を語る言葉の熱さでよくわかる。

そして、兄もまた、拒まない。

それが、臣下としての勤めだから。

そして、また、私と兄との差が広がる。

永遠に縮まることのない差が。

「それは良いとして、そろそろ針の時間です」

けれど、今はそんなことを気にしている場合ではない。

主君である彼女のことを考えるのが一番だ。

それが私に課せられた責務ならば、最低限果たさなくてはならない。

そして、日が暮れ、世が明け、日が巡る。

僕にとって、情性でしかない時間が過ぎていく。

けれど、それもやがて終わる。

戦がそろそろ本格化してきた。

兄の出陣の回数が増えてきた。

そして、僕の回数もまた。

今の僕の任は、この国の王位継承者である彼女の護衛。

そして、近衛騎士団一軍二番大隊の大隊長。

16の時に就任を命じられた。

同じ年で団長に命じられた兄とは大違いだ。

けれど、立場は同じ。

戦場で戦わなくてはいけない。

そして、今日もまた戦であつた。

「皆の者聞け！！今日は第一王位継承者である。ルナ姫も一緒に出陣なさる。くれぐれも、非礼がないように！！」

ただ、違うのは、彼女がいることのみ。

これから、王となる者として、戦場を見ておく。

そのためである。

実際、現王であり彼女の父でもあるウッドガルド王も、戦場を見たことがある。

もちろん、安全には十分気をつけられている。

実際、ここは比較的、小規模なところであるため、すぐに制圧できた。

事実、二番大隊だけで十分制圧できた。

けれど、それでも、現実の戦いはダメージの大きいことであつたため、ショックを受けていた。

まあ、僕も初陣のときはそうだったのでその気持ちは痛いほどわかるが。

だからといって、泣き言を言えるわけでもなかった。

結局、僕は貴族であり、騎士なのだ。

この国の盾でしかない。

だから、戦わなくてはならない。

それが宿命なのだ。

そして、彼女もまた同じ。

王族である限り、この国を守るため戦への指示を出さなくてはいけない。

場合によっては、自分自身も戦場へと向かわなければならない。

軍は、勝ち鬨を上げ、戦場から立ち去る。

国境の防衛は終わった。

もうここには用がない。

だから、帰る。

そう思っていた。

けれど、その瞬間すべてが狂い始めた。

そう、この瞬間、僕は更なる絶望の中へと落とされることになった。

「ユリウスの大軍です！！こちらへと進軍してきます！！」

斥候からの一言からすべてが始まった。

ユリウスとは、僕たちの国の同盟国である。

同盟協定もしっかりと結んでいた。

そのはずだ。

けれど、その国がその協定を無視して、大軍を押しかけてくる。

それは、つまり……

ユリウスの裏切り。

しかも、おそらく、狙いは……

王位継承者である彼女。

彼女の身柄を拘束し、無理やり婚姻すると同時にこの国をのつとる。

そういうことなんだろう。

おそらく、戦乱が激しくなったこの時期を狙っていたのだろう。

国境を守るため主要な戦力は防衛のためにさかれることになる。

そうなれば、守備は手薄となり、王宮は格好の的となる。

さらに、この国の風習を考えれば、次世代の王である彼女も戦場に出ることになる可能性が高い。

そこを狙って。

そういう事なんだろう。

けれど、うかつだった。

さすがに、ウッドガルド王もそして、兄でさえも予測していなかっただろう。

どちらにしろ、僕たちに残されたては一つしかない。

逃げること。

安心できる要素の一つして、向こうは大軍。

しかも、10万をこえる超大軍だ。

進軍にかなりの時間をとられることになるはずだ。

ならば、逃げ切れるはずである。

向こうの何百分の一でしかない僕たちの大隊ならば足が違う。

「皆の者、よく聞け。われわれは、今から撤退する。速やかに必要不可欠なものだけ持って、この場から離れる。その際、各小隊長の命令は厳守するように」

そして、僕たちは・・・

私たちは撤退し始める。

兄と比べれば、なんとも無様だった。

兄ならば、この場でも戦えるだろう。

あの大軍に無差別魔法を一撃食らわし、混乱したところを切りかかり、自分はまた、魔法を放つ。

その間に伝令を飛ばし、あとは後続が来るまで耐えるのを待つだけ。もちろん、場を見極めて、引くこともするだろう。

けれど、私のように逃げ出すことなどないだろう。

決して・・・

「だめです、大隊長、逃げ切れません！！足が速すぎます！！」  
けれど、運命の女神はどこまでも残酷だった。



ありえない事をさらにありえない事を重ねたのだ。

通常大軍が私たちのような小規模軍へ追いつくことは不可能だ。

ありえない事だ。

けれど、現実にはある。

それはつまり、常識の範疇外での業と言うことだろう。

ならば、何があるだろう。

けれど、考えてみても、出てくる答えは一つ。

魔法。

それしかない。

僕にはそんな魔法があるかは知らないけれど、実際こうして追い詰められているのだからそうなのだろう。

まあ、兄なら知ってるかもしれないけど。

けれど、わかったからといって、解決したとはいえない。

いや、わかったからこそ、事態はさらに紛糾したと考えても良いだろう。

逃げられない。

つまり、応戦しなければならなくなるからだ。

しかも、彼女を守りながらだ。

けれど、私には、それができる自信はない。

兄ぐらいの力があれば、可能かもしれないけれど、私には無理だ。

あの膨大な魔力があれば・・・

そこまで考えて、思い至る。

唯一の、逃げ道を。

生贄。

そう、生贄を出すのだ。

兄の魔力はあれは生贄だ。

時間稼ぎのために使うおとりなのだ。

ならば、その罠を作ればいい。

そして、その罠というのが生贄。

逃げるための罠として置いて行くのだ。

そして、後は、どこかに隠れて、後続を待てばいい。  
そうすれば、彼女を守りきれる。  
けれど、その代わりに……

私は仲間を見捨てた大将。

そして、彼女は、我が身恋しさで、臣下を切り捨てた王女。  
二人して、その烙印を押されるのだ。

別に僕はいい。

どうせ、僕には、光り輝く未来はない。

兄がいる限り、僕は栄光を手にとることができない。

兄の手にすべてが集まる。

けれど、彼女は違う。

これから、王となり、民から尊ばれなくてはならない。

だから、ここで泥などついてはいけないのだ。

だからといって、ここで彼女を死なせるわけにはいかない。

「大隊長様、時間があります。ご決断ください」

彼も私の考えてることがわかるんだろう。

彼との付き合いは私が就任してからずっとだ。

それなりに長い。

だから、私がどんなことを考えているのわかるのだろう。

そして、何に逡巡してるのか。

「なんなら、その任を私が受けてもかまいません」

その目がすべてを語っている。

そして、彼が言うこと。

それは私の部隊全員が承諾していることになる。

だけ……

「隊員を全員、集める」

私は、それに答えることはせず、全員を呼び集める。

そして、

「いまから、お前たち全員に逃げてもらう」

作戦を打ち明けた。

それは、私が考えたどれでもなく、彼が考えていたものでもなかった。

周りが騒然とする。

当然だ。

このままでは到底逃げ切れないからだ。

私だつてわかつている。

けれど、誰かを犠牲にしてまで

それこそ、私を信じてくれている仲間を犠牲にしたくなかった。

そう、なるなら・・・

「そして、私だけここに残る。私が足止めしておこう。その間に、お前たちは、王都に行き、救援を頼め」

私だけで十分だった。

それに勝算だつてある。

ただ、それをやれば、私は二度と戻つてこれないだろう。

けれど、それでいい。

どうせ、私には何も無い。

ならば、すべてを無に返そう。

それが良いんだ。

けれど、それを周りは許さない。

私はそれを嬉しく思い。

そして、申し訳ないと思つた。

けれど・・・

「これは、大隊長命令だ。逆らうものは、切り捨てる」

やめるわけにはいかなかった。

「ギエン。ルナ姫のことをよろしく頼む」

「大隊長、おやめください。自重を、ぜひ自重を・・・」

なんとしてでも、とめたいのだろう、私の言つてることには耳を貸さず、まるですがりつくかのように訴える。

けれど、

「それが、将たる者の勤めだ。行け」

それを無視して、背中を押す。

そして、ルナ姫のほうへと向き直る。

その顔がどこか険しいのは、気のせいじゃないだろう。

「最後まで、あなたの警護をすることができない無礼をお許しください。ただ、我が家の誇りを傷つけぬためには、どうしても、こうするしかないのです。後のことは、ギエンに任せております。至らぬ点があるかもしれませんが、どうか、重ね重ねお許しください」これが、主君への最後の言葉。

彼女をおいて、行くのだ。

黙っていくとなれば、それはある種の職務放棄に該当する。

だから、言わなくてはならない。

「それでは失礼します」

けれど、言うことを言えばそれはおしまい。

単なる形骸的なものでしかないのだから。

「ちよつとまちなさい」

けれど、彼女のほうが違ったらしく呼び止める。

その表情は先ほど以上に、険しかった。

「あの大軍を一人でとめるつもりなの？」

「はい」

信じられない。

そういう意味での問いなのであろう。

確かに、私がそうするといわれれば信じられないだろう。

兄とは違うから。

兄とは違って、私は弱い。

所詮単なる人でしかない。

今のままの私では。

「あなたは、彼ではないのよ。天才でもなければ、化け物でもなんでもないのよ？そんなあなたにそれができると思ってるの？」

人が聞けばそれは辛らつな言葉に感じられるだろう。けれど、私にとってはありがたかった。

彼女は、私を見てくれている。  
それだけでいい。

私は呪文を唱える。  
転送用の魔法だ。

周りが騒然とする。

私がしようとしていることは一目瞭然だからだ。  
けれど、誰も止めない。

いや、とめられないのだろう。

兄よりは弱い、それでも、ここにいる人間のなかでは、私は最強だから。

そして、詠唱が終わり、あとは放つだけになった。

彼女のほうへと向く。

非難がましく見える。

私は彼女にとつて、失いたくない人間になれたのだろうか。

私は彼女のが好きだった。

ただ、一人の人間として接してくれる彼女が。

けれど、分不相応な恋でしかない。

それに、彼女には、兄がいる。

完璧な兄が。

だから、私には出る幕はなかった。

まあ、ほしいわけでもなかったが。

彼女が幸せならそれでいい。

綺麗事かもしれない。

たんなる臆病者の言い訳なのかもしれない。

けれど、私は本当にそう思っている。

だからこそ・・・

「止めてみせます。それが、兄ではなく、私、ミハエル」  
「ジェル」  
クロフォードにできる、唯一のことですから  
守りたいんだ。

「ゲート」

私は、ここにいる全員を移動させた。

さすがに、王都までは無理だろう。

けれど、それでも、追いつかれることはないだろう。

そして、それと同時に、私が使う魔法の余波を受けることもないだろう。

## 中篇

私には秘密があった。

それこそ、誰にも教えたことのない。

それは、誰にも教えるわけには行かないからだ。

教えれば、私はきつと殺されるだろう。

または、よくて、国外追放。

どちらにしろ、私にとってよくないことは確かだ。

家にとつても。

家名に傷がつくことになるだろう。

忌み子であるとしられれば。

それに気がついたのは、10歳のころだった。

兄に一步でも近づきたくて、私は、必死になって、魔法の勉強をし、

鍛錬に明け暮れた。

そして、ある日目覚めたのだ。

因子が。

高位魔法を使おうとしたときのことだった。

自分のうちから出る魔力が制御できなくなったのだ。

そんなことは初めてだった。

今まで、自然とこなせていたのだ。

けれど、それができなくなった。

私は、慌てて、詠唱を中断した。

そして、見たのだ。

泉に浮かぶ私の顔に埋め込まれた深紅の瞳を。

真っ赤な血の色をした瞳を。

そして、それが証だった。

忌み子の。

起源はわからない。

ただ、その色をした瞳を持つものは、災いを招くものとして、忌み

嫌われていた。

それが私なのだ。

それを知ったときは愕然とした。

その赤はすぐに消えたが、高位魔法を使おうとすると、それに反応して、瞳も赤くなる。

それはつまり、私には、永遠に兄を超えることはできない。

そういうことだった。

この瞳をさらけ出せば、殺される。

兄を超える。

そんなことは夢でしかない。

だから、ずっと封印してきた。

今まで。

だけど、今はそういうわけには行かない。

みんなを逃がさなければならぬ。

それが私の使命だから。

私が私であることを認めてくれた仲間たちを守ることが。

「ユリウス軍に告ぐ、命がおしくは、ただちに自国へと帰られよ」

魔法によって、拡声する。

けれど、とまらない。

数々の嘲笑がもれるだけ。

当然のことだろう。

「我は、ミハエルⅡジェルⅡクロフォード。その名を聞いても、まだ、くるか！」

これならどうだ。

私の名前も少し走り渡っているはずだ。

天才の弟ということだ。

けれど、それでも、とまらない。

所詮は1千の大隊でしかないということもばれているのだろう。

そんなもの相手に足踏みし照られない。

そついうことだろう。



ならば・・・

「それでも、戦うというのならば、相手しよう」  
殺すのみ。

ミハエルの配下は急いで戻った。

いくら、大隊長命令でも聞けなかった。

いや、聞けるはずもなかった。

彼らはみんなミハエルのことが好きだった。

最初は天才の弟と聞いて、いい思いをしなかった。

その強さに便乗しただけの貴族の坊ちゃんだと思えなかった。

そんな天才が二人といえるとは思わなかった。

けれど、彼と触れていくうちに気がついた。

彼が、その兄のためにどれだけ傷ついているのか。

そして、それでも前を見てけなげに戦っていた。

たった16歳の子供が。

だから、好きだった。

この人になら、命を預けてもいいと思った。

けれど、その人は逆に自分たちを助けるために、自らを犠牲にした。

彼らはミハエルの力を知っていた。

彼の力はそれこそ、彼の兄がいなければ、団長になってもおかしく

ないほどのものだった。

けれど、それでも10万の大軍を相手にできるはずもない。

彼の兄ですら不可能だ。

だから、自分たちも駆けつけなくてはいけない。

それが、臣下の勤めだから。

ギエンは隣を見る。

そこには、彼の上司の主君である、ルナの姿があった。

本来ならここにはいけないはずだった。

けれど、彼女は頑として譲らなかった。

そして、初めて聞かされた真実。

彼女が好きだったのは・・・

ミハエルだった。

ルナもまた、彼に触れることで、その危うさに気づいた。

そして、それでも戦う姿をひそかに称えていた。

たびたび、彼女が彼の兄の名を出すのは、それぐらいしか、共通の話がなかったから。

なんでもいいから話したかったから。

それだけのことだった。

別に兄のことなどどうでもよかった。

ミハエルのことだけを思っていた。

その人が、今戦場で散ろうとしている。

しかも一人で。

そんなものルナに耐えられるものではなかった。

たとえ死んでもいい。

いや、死ぬなら、せめて好きな人のそばで。

それが彼女の心情だった。

例え、それが王家への反逆だったとしても。

大隊がかかる。

そして、辿り着く。

先ほども、自分たちがいた場所に。

けれど、それと同時に驚愕する。

その場の変わり果てた姿に。

先ほどもでは豊かな緑を抱えた草原だった。

けれど、今はどうだ。

緑などどこにもなく。

あるのはおびただしい数の死体だけ。

大地のいたるところは土がえぐられ、焼けこけ、焦土と化しており、

大地は死体から流れる、紅を飲み干し続ける。

その姿は異様だった。

ある種異世界だった。

それこそ、悪夢を見ている。

それで済ませたかった。

けれど、それでも、これが現実だった。

彼らは、ミハエルを探し始めた。

例えば、彼がこれをやったとしても、10万の大軍を相手にできるはずもなかった。

いや、できるはずがない。そう思いたいのだ。

けれど、現実はどこまでも容赦なかった。

体中を血で濡らしたままたつ少年がいた。

誰もが、ミハエルだとわかった。

けれど、それと同時に認めたくなかった。

彼らが見つけたミハエルの瞳は赤かったから。

「戻れといったはずだが？」

気がつけば、彼らは全員残らず、僕の前に戻ってきていた。

そして、僕の瞳を見て、驚きを隠せないでいる。

当然か。

なにせ、自分たちが大将と崇めていた者が、忌み子であるを知ったのだから。

本当は彼らの誰にも知らせるつもりはなかった。

ただ、両親と国王にそれを伝えて、さっさと逃げるつもりだった。

けれど、彼らに知られてしまった。

絶対に知られたくない人々に。

もし、両親たちだけならば、ことを公にしないだろう。

外聞のいいことではないことは確かだからだ。

それこそ、今まで王女の護衛として、忌み子を使っていた。

そんなことを知られれば、王宮始まって以来の汚点だ。

公にできるわけがない。

だから、彼らには伝わることなどない。

私は戦場で死んだ。

そうなる事になるはずだった。  
なのに・・・

私は、方向転換をすると、呪文を唱える。  
周りがはつとする。

けれど、遅い。

私は、あつという間に詠唱を済ませると、移動する。

これ以上一緒にいられるわけもなかった。

それから、数時間後に救援が来た。

近衛全軍だ。

それはつまり、彼、ミハエルの兄がこの場に到着したことになる。

けれど、現れた彼は、目の前にある惨劇の後を見て、言葉を失った。  
伝令の内容はこうだった。

ユリウス軍10万が侵攻中。至急応援を頼む。

彼は驚いて、急いで隊を整えて、こちらまで向かってきた。

けれど、来てみればどうだ。

救援を呼んだ隊はまったくの無傷で、逆に大軍はどこにも見えたら  
ない。

あるのは、無数の死体だけ。

彼は弟を探した。

彼がこの隊の一応の責任者だからだ。

「大隊長はどこにいる？」

すぐそばにいた者に聞く。

ギエンだ。

けれど、彼は渋い顔をして答えない。

いや、誰も答えない。

答えられるはずがない。

ここまで非現実な世界のことなんて答えられるはずがないのだ。

そして、さらには、自分たちの大將が忌み子だなんて。

誰も答えないのに、業を煮やした彼は、ルナ姫を探した。

彼女なら答えてくれる。

そう思ってたことだった。

けれど、すぐに後悔した。

彼女は答えてくれた。

けれどそれは、彼にとってもショックの大きいものだった。

それはそうだ。

これをしたのが、彼の弟ならば、さらには忌み子であるという事を知らされたのだ。

彼は知っていた。

自分の弟が秘密を抱えていることを。

そして、それと同時に、自分の事をねたんでいることを。

けれど、彼はそんな弟が好きだった。

自分のせいで、彼の道はつぶされてしまった。

自分と同じように軍部に入り、自分と同じように戦功を立てる。

それを強いられる生活だった。

いつそのこと自分なんて死んでしまえばいい。

そう思ったこともある。

けれど、そのたびに死ねなかった。

弟の存在があったから。

今ここで死ねば、弟はどうなる？

さらに、辛い立場になることは必至だ。

俺のように俺のように、それを請われるのだ。

そして、弟はそうして生きていく。

彼に、すでに個はない。

そんなものは捨ててしまっている。

自分のせいで。

その思いがあるせいで彼は死ねなかった。

けれど、同じだった。

弟を守りたかった彼はそれがかなわなかった。

ミハエルは自分が守りたいもののためにすべてをなげうった。

おそらく、今まで自分に架していた戒めを解き、すべてを開放した。  
彼は、以前文献で呼んだことがあった。

忌み子の力を。

そして、それゆえに疎まれたことを。

彼は目の前にある世界を見た。

その力は、まさしく破壊の限りを尽くしていた。

けれど、彼にとってそれは、悲しみ以外なんでもなかった。

彼は撤退し始める。

ここには、ミハエルはいない。

それを聞いたからだ。

それから数カ月後。

二人の婚儀が決まった。

もちろん、ルナ姫と彼の兄　ルエリア「ジェル」クロフォード「ア  
ルフィノア　とのだ。

ルナは最後まで拒否した。

そして、ミハエルのことを弁護し続けた。

けれど、誰も擁護してはくれなかった。

忌み子は忌み子。

例え、戦乱の中で自分の部隊を守った人間。

それこそ、貴族であっても、いてはいけない存在だった。

ルナは途方にくれた。

そして、この婚儀。

ルナにはこの婚儀のわけがすぐにわかった。

ミハエルのことを忘れさせるためのものだろう。

一時の感情。

それこそ、近くにいたから感じた勘違いだ。

そう思い直させるためのものなのだ。

けれど、ルナにとっては屈辱以外なんでもなかった。

勘違い？

勘違いであんな激しい感情を持てるはずがなかった。  
人は言う。

憐憫の情だ。

けれど、ルナにとっては思慕以上のものだった。

それこそ、かなわないうると思っていた思いだ。

彼が自分の事をなんとも思っていないことなど百も承知だからだ。  
彼の兄の姿がある限り。

けれど、それを無視しての婚儀。

精一杯の拒否も願わずかなってしまう。

ルエリアも拒否しない。

いや、彼女も期待していなかった。

彼は所詮請われるがままに動くことしかできないものとしか見なし  
ていなかったからだ。

そして、婚儀が始まる。

彼女にはすでに感情は消えうせていた。

そこにあるのは王族としての勤めを果たすだけの人形。

結局はこの婚儀は人形同士の三文芝居。

王国のためだけに開かれたもの。

そこには誰の思いもくまれていない。

だからこそ・・・

天が味方した。

あるいは敵か。

オルガルドが侵略されたのだ。

全方向から。

それは奇襲だった。

すべての手順を省略しての城攻め。

王城攻めだった。

しかし、それが効いた。

式典のために王都は人であふれかえっていた。  
そこを狙われてしまえば、ひとたまりない。

おそらく、こんなものはどこにでも通用しないだろう。  
常識では考えられない。

しかし、それを可能にしたのが・・・

ミハエルだった。

ミハエルの存在があったため、急遽式典が行われ、国が慌しくなり、隙を作ることになった。

そこを狙われた。

王都は即座に未曾有の混乱の地と化した。

民は逃げ出し、騎士たちは必死に守ろうとする。

けれど、数が多すぎて、手が回らない。

それは、ルエリアにとっても同じだった。

今までとは勝手が違った。

圧倒的な不利な状態での戦い。

それは彼が経験したことのない戦だった。

今まで彼は、有利になるように仕向けて戦をしてきた。

数が少なければ、地の利を。

地の利をとられれば、策と情報を。

けれど、今回はすべてとられてしまっている。

こんな状況では活路を見出せない。

むしろ、滅びるしかない。

自国を囲むすべての国からの強襲。

それを耐えられるわけがなかった。

それは、皆わかっていた。

いや、一つの部隊以外は。

そう、彼の、ミハエルの部隊だけは違った。

今は、ミハエルの後任としてギエンがついているが、誰もが、自分の大將はミハエルだと思っている。

そして、ミハエルは、自分の臣下を見捨てる。

そんなことができるような人ではない。

そう信じていた。



そして、それはすべからく事実だった。

敵軍の後方から粉塵が巻き上がった。

それは、ミハエルの助けを伝える、一撃だった。

それから後はあつけなかった。

あるものはゲヘナの炎に身を焦がし、あるものは氷の女神の息吹に触れ凍り、あるものは気まぐれな風の精に身を切り刻まれ、あるものは、泰然たる大地の怒りに飲み込まれる。

敵はその恐怖に崩れ、あつという間につぶれてしまった。

勝てるわけがなかった。

忌み子、化け物と呼ばれるものに勝てるわけがなかったのだ。

そして、彼は、いや彼らは、姿を現した。

赤の瞳を携えた、忌み子の一族は。

そして、その中でひととき目立つ真紅の瞳を持つ少年。

ミハエルが王族の前に。

彼らは慌てた。

目の前に、自分たちでは到底抗えない者がいる。

化け物。

そう呼ばれるものが集まっている。

「兄はいますか？」

そして、ミハエルがそうたずねる。

## 後篇

久しぶりの王城だった。

本来ならこんなところに二度とくるつもりはなかった。

けれど、彼女の、ルナ姫の婚儀があると聞いたから、わざわざ来たのだ。

兄と結婚するのだ、彼女も幸せだろう。

そして、そんな彼女を見たい。

その一心でただただだった。

けれど、来てみればどうだ。

ルナ姫はまるで、人形のように感情をなくされており、兄もまたしかりだった。

狂気に犯されたんじゃないかと思うぐらいだった。

けれど、だからといって文句を出せるわけもない。

今の僕は、たんなる国際指名犯。

それに、例え、それがなかったとしても、単なる一貴族の息子ではない僕にそんな権利はない。

けれど、だからといって、これ以上二人のあんな姿を見たくなかった、

だから、帰ろうと思った。

けれど・・・

そう思った矢先に王城が攻め込まれた。

しかも、周りを囲むほどの大軍で。

最悪だった。

いくら、守備のための軍がいるとはいえ、圧倒的に数が少なすぎる。しかも、まったく予備動作を使わずに出てきたのだから、転送用の魔法を使ったのだろう。

かなり強力なやつを。

おそらく、何百人体制という大掛かりなものだったのだろう。

それぐらい、魔力消費が大きい。  
けれど、それが効果覲面だった。

守備軍は奇襲に慌てて勇み足を踏み。

民は恐怖に慄き混乱し、阿鼻叫喚の地と化す。

まともに応戦できるような体制ではない。

僕は、ため息をついた。

この国ももう終わりだろう。

隣国すべてからの総攻撃を受けた。

それはつまり、すべてが敵。

そういうことだ。

おそらく強くなりすぎたのだろう。

そして、それは兄が原因。

向かうところ敵なしの完璧な天才。

その存在がそうさせたのだろう。

いつかは、この大陸全土がこの国のものとなる。

それを恐れたのだろう。

そして、兄にはそれだけの力があつた。

それだけの軍略を持っていた。

完璧すぎるが所以のこと。

けれど、それが摂理。

どうしようもないこと。

だから、僕が手出しはしない。

それに、兄ならどうにかできるだろう。

天才と言わしめるその力で。

だから、僕は自分の里へと帰った。

第二の里。

忌み子達が集まる村。

僕のように逃げるしかなかったものたちが集まる集落だ。

僕はそこに逃げ込んだ。

最初こそ、歓迎されなかったが、次第に少しずつ受け入れてもらえ

るようになり、今では、里の代表者にまでのし上がった。

まあ、卓越した知識に、常軌を逸した忌み子の中でも、特に強力な魔力、そして、人柄、それらをかねそろえたからだろう。

もちろん、通常なら、短時間でそれをなされるわけもない。けれど、忌み子の力は特別だった。

紅眼には、数多くの能力があった。

そして、その中に、相手の心理を読む能力もある。

もちろん、すべてを読めるわけではない。

ただ、その人となりの大体を把握できるだけである。

けれど、それで十分だった。

その人の人間性を十分に把握できたからだ。

それに、里の代表者が決めたことは誰も拒否できなかった。

代表者の言葉は絶対だからだ。

そして、その代表者によつて、僕は、今の立場にいる。

みんなが僕に会うと挨拶をしてくる。

もちろん、僕もそれを返す。

それが礼儀だ。

そして、この村の一番奥に僕の家がある。

代表就任が決まると同時にみんなが作ってくれた。

もちろん、僕も手伝った。

まあ、魔法のスペシャリストである彼らが作れば、ものの数十分で完成したが。

中に入ると、僕は、コーヒーを入れ、茶菓子を出す。

これは、昨日お隣の人にもらったものだ。

その人はここに来てからずっとよくしてもらっている。

僕はそれを食べながら、ぼうつと考える。

いや、感知する。

そういったほうが正しいか。

今、僕は、王都の動向を見ている。

けれど、それはまったく芳しくなかった。

いつ崩れてもおかしくなかった。

いや、もうすでに崩れだしているだろう。

もうそろそろ防衛線も破られるだろう。

そして、そこを任されているのが兄だった。

けれど、その兄の采配は焦りばかりが目立ってなっていなかった。

周りのせいなのだろうが、兄らしくなかった。

これでは、もう持たない。

もうすぐ、この国は滅びる。

それがわかった。

けれど、僕にはそれは関係なかった。

あの戦で僕とこの国との関係は断絶した。

だから、関係ないこと。

僕は感知をとく。

今日はなんだか疲れた。

さっさと寝てしまおう。

そう思った。

けれど、どんなに寝ようとしても、眼がさえて眠れない。

いつそのこと魔法を唱えてでも、眠ろうか。

そう思ったときだった。

誰かが僕の名前を呼んだのを感じたのは。

誰かわからなかった。

けれど、確かに僕の名前を呼んでいる感じを受けた。

そして、思い出す。

仲間のことを。

彼らはあそこで戦っている。

そして、このままではおそらく死んでしまう。

この国はそういう運命だから。

そう、大切な人を失うことになる。

果たしてそれでいいのだろうか？

いや、よくはなかった。

僕は、寝室に行くと、タンスから服を出す。  
依然着ていた、軍服。

もう二度と着ることなどないと思ってた。  
けれど・・・

戦場に行くなら、これしかなかった。

この服には今までの思いが刻み込まれている。  
人殺しとしての。

僕は、転送用の魔法の詠唱に入る。

ここから、王都までならすぐにいける。

そして、僕は、王都を囲む軍を見つけた。  
足元に。

僕は、新しく魔法の詠唱に入る。

僕が知ってる中で最強を誇る魔法。

奇襲には奇襲を。

超特大の魔法をぶつけて混乱させてやる。

僕は、高速で詠唱を済ませると、放つ。

物質崩壊の魔法を。

そこから先は、もう戦といえるものではなかった。

僕は無差別に魔法を放ち、敵を追い立てる。

しかも、いつの間にか、僕の集落の若衆も集まって、一緒になって  
魔法を放っていた。

彼らの話では、里のものの守る者は里の守るもの。

そういうことらしい。

僕は感謝した。

さすがに、僕一人では時間がかかりそうだった。

けれど、彼らのおかげで短縮できた。

そして、僕たちは、いま、この国の国王の前にいた。

それと同時に兄を待っていた。

すぐに兄は出てきた。

ぼろぼろの姿で。

おそらく前線で戦っていたのだろう。

多数の返り血を浴びている。

まったくの無傷の僕たちとは大違いだ。

けれど、そんなことはどうでもいい。

今話し合うべきことは、そんなことではない。

「兄さん。これはどういう事ですか？王都はほとんど壊滅状態。王城にまでダメージを受けることになる。私が人のことを言えた義理ではないのかもしれませんが、兄さん、貴方はしっかりと、この国を守ったのですか？」

誰も声を上げない。

何もいえない。

忌み子風情が何を言う。

その言葉すら出てこない。

みなが恐怖している僕たちの力に。

兄は答えない。

ただ、俯くのみ。

たぶん、今、僕は兄より上にいる。

けれど、嬉しくはなかった。

むしろ逆にむなしかった。

別に僕は兄に勝ちたいわけではなかった。

ただ人に僕は僕、ミハエルとして認めてもらいたかっただけ。

けれど、僕は人ではなく、忌み子として認識され、それゆえに兄を超えた。

むなしかった。

「まあ、良いです。おそらくこの国は滅びるはずですが、  
けれど、表情は変えない。」

貴族として生きてきた上で身につけたスキルだ。  
けれど、そんな僕とは逆に、周りは騒然とする。

「隣国は怯えている、この国の脅威に。いつか、攻め込まれ侵略さ

れるのでは、と。そして、だからこそ攻撃に転じる。やられる前に、やる。それこそ、周りを引き込んででも」

そして、その結果がこれ。

僕たちが来たおかげで何とか滅亡は免れたがこのまま衰退していくことは日を見るより明らかだ。

けれど、僕にとって、それは関係ない。

どうでもいいことだった。

この国が滅びようとうなるうと知ったことではない。

僕は守りたいものを守るために戦う

それだけのこと。

そして、僕は振り返り、若衆のほうへと向き直ると合図する。

これ以上ここにいる必要はない。

ただ、それを言いにきただけの事。

兄に。

この国は滅びる。

だから、例え滅びても、彼女を、ルナを守ってほしい。

それを言いたかった。

誰かが呼び止めた。

この国の守護をしてくれ。

そういうことだった。

けれど、僕たちの誰もがうなづかない。

僕は代表者。

だから、里のものの思いを汲まなくてはいけない。

彼らは外のもののことを嫌っている。

自分たちをただ紅眼というだけで、迫害してきた。

それが許せないでいる。

だから、その申し出を受け入れられるはずがなかった。

いまさらになつて都合よく、そんなことを言われてもばかばかしくて仕方がない。

それに、例え、守ったとしてもその後のことなどたかが知られてい



る。

暗殺されるだろう。

用無しとなった僕たちは、その危険性により殺される。

それが眼に見えているのだ、うなづけるわけがなかった。

だから、滅びよ。

そういうことだ。

僕は移動する。

彼らには帰ってもらった。

僕にはよるところがあった。

目の前には、大きな木の建物がある。

軍の宿舎だった。

そして、このエリアは・・・

以前の僕が所属していた大隊だった。

少し緊張しながら、中に入る。

玄関には誰もいなかった。

おそらく、この時間は、修道場のはずだ。

僕はそっちに向かう。

そして、そこにいた。

ドアを開けた僕のことを拍手で招き入れてくれる仲間がいた。

紅眼をした僕のことを受け入れてくれる仲間がいた。

それから飲んだり食べたりして騒ぎ続けた。

そして、夜もふけたところに、

「みんなも私がいる村へと来ないか？」

唐突に切り出した。

みんなが驚いたような顔をする。

けれど、僕にとっては聞いておきたいことだった。

「もうすぐこの国は滅びる。強すぎるが故にだ」

国王に言ったことを、そのまま伝える。

「だから、私たちの里へこい。お前たちならきつと受け入れられる。私が保証する」

けれど、意味合いは違った。  
失いたくない。

だから、そばにいてくれ。  
その思いからだった。

けれど、誰一人としてうなづかなかった。

彼らには家族がいる。

家族のことを考えると、どうしてもうなづくわけにはいかなかった。

僕にもそれがわかった。

わかっていたけど、聞きたかった。

聞かないと後悔すると思った。

僕は、立ち上がると、みんなに別れを言う。

もともと、この話をするために来たのだ。

用件が終われば帰らなくてはいけない。

里にもそれなりに掟と言う物があるわけだし。

それを代表者が守らないと周りに示しがつかない。

みんなが渋るのをなだめてから、私は自分の家へと戻った。

けれど、行くとときと状況が変わっていた。

人がいたのだ。

しかも、長老たちが。

この里には長老と呼ばれる人たちがいる。

簡単に言う代表者の相談役といった感じだ。

その彼らがいる。

僕は自然と身を硬くした。

「君の同行を観察させてもらった」

そして、それと同時に、冷水のような言葉を浴びせられた。

それはつまり、僕が彼らに言ったことを聞かれたということだ。

本当は、誰にも言うつもりはなかった。

どうせ断られることはわかっていたのだから、僕の胸一つに収めて

おくつもりだった。  
なのに・・・

「申し訳ございません」

僕は即座に謝った。

「紅眼の一族以外のものをここに呼ぶことは確かに、禁じられているのは知っていました。けれど、彼らは私にとってかけがえのない仲間でした。その仲間が死ぬかもしれない。そう思ったら、言わずにいられなかったのです」

誠意を見せるしかない。

言い訳は通用しない。

だから、言うことになった経緯を伝える。

これ自体がいいわけじみたように聞こえるかもしれないが、彼らはそうは受け取らないはずだ。

まあ、許されるとは思えないが。

僕は頭を下げ続ける。

そうするしかできない。

けれど、不意に笑い声が起きた。

しかもいたるところから。

僕はびっくりして、周りを見渡す。

そこには、この里の人たちが集まっていた。

僕は何がなんだかわからなかった。

そんなことは、彼らは百も承知なのだろう、盛大に笑い終わると

「先ほど、私たちが、君の国の王のところに行ってきた。そしたら君と同じく、援助をほしがられた。もちろん、私たちは拒否をしたよ。けれど、しつこくお願いされた。だから、こう提案させてもらった。私たちは基本的に後方支援として、参加し、その場合、一度の報酬は一人につき砂金袋を一袋、とね。けれど、だからといって、素直にそれを飲んでくれるとは限らない。だから、人質として、彼らの中で重要な人物を預かることにした」

長老のうちの一人がそう答えた。

けれど、まったく意味がわからない。

彼らは、恨んでいたはずだ、彼らのことを。

忌み子と疎んじ、蔑まされたことを。

それが、わかったのだろう、また別の長老の一人が答える。

「これは必要なことなのじゃよ。この里の規模もいい加減大きくなってきた。中には、紅眼でないものもある。里の中もいよいよ、このままでは機能しづらくなってきた。実際、この里の平均収入自体も減ってきておる」

すべてを自給自足するわけには行かなかった。

だから、足りないものはそのつど、買いに行っていた。

もちろん、眼の色を変えて。

「けれど、それも、もうそろそろ限界じゃ。だから、向こうさんを利用させてもらうことにした。せつかくの商売相手が見つかったのだ、捨ててしまうのはもったいなかろう?」

だからといって、それでいいのだろうか。

皆は納得しているのだろうか。

「もちろん、里の者の了承は取ってある」

それなら、文句は出なかった。

彼らが承認しているのならば、僕が口に出すことではない。

「わかりました」

僕は、それにうなづいた。

それ以外言いがなかった。

これで、話は終わり。

みんなそれぞれ自分の家に帰っていく。

長老たちも。

僕は全員が帰ったのを確認するとため息をつく。

もうこれ以上戦いに身をおかなくてもすむ。

そう思った矢先にこれだった。

でも、まあ、それも宿命に違いないが。

今まで、それこそ今日もたくさんの人の命を奪ってきた。

そんなやつが、戦いたくないなど言うわけにはいかないだろう。

僕もまた、戦場で散るだろう。

それが、騎士としての宿命だ。

また、ため息をつく、寝室に戻る。

今日は本当にいろいろありすぎて疲れた。  
眠たかった。

部屋の扉を開ける。

「・・・・・・」

けれど、即座に閉める。

ありえないものを見てしまったからだ。

そうありえない。

僕のベッドの上にちよこんと座るルナ姫。

そんな姿があるなんてありえない。

あつてはいけない。

僕は、いそいで、転送用の魔法を唱え始める。

けれど、それよりも一足早く、ドアをあけそれを中断された。

彼女の手によって。

何もわからなくなった。

どうして、彼女がここにいるのか。

「会いたかった」

そんな僕を置き去りにした彼女は続ける。

「どうして、私のところには会いに来てくれなかったの？私は待つ  
てたのよ。それとも、私はミハエルにとってどうでもいいものなの  
？」

「いえ。」

そんなわけがなかった。

だからこそ、兄に後のことを頼んだのだ。

そして、会いに行かなかったのは・・・

決心を鈍らせないため。

彼女に会えば、また来なくなる。

また会いたくなる。

それが分かっていたから。

彼女がそれを望まなくても。

けれど、驚いたことに彼女は、僕のことを思っていてくれた。やはり、憐憫の情を持っていてくれたのだろう。

それだけでも十分嬉しい。

「そう、それはよかった。」

彼女も安心したように安堵の息をつく。

せめてもの安らぎを。

そう思つてのことだった。

「それなら、安心して、ここで住めるわ」

「え？」

けれど、彼女の返した言葉は驚きに十分値することだった。

「私は、人質としてここにきたの。決して、紅眼の一族を裏切らない、その証のために。」

けれど、彼女の言葉を聴いて、理解した。

長老が言った人質、それが彼女なのだろう。

まあ、彼女なら、人質としての価値なら申し分ない。

彼女を切り捨てることなどできないからだ。

唯一の王位継承者だから。

けれど、思い切ったことをしたものだ。

彼女を人質にするとは。

けれど、彼らにしてみれば、それぐらい僕たちの力は重要で必要なのだろう。

国を守るためには。

しかし・・・

「ルナ姫はそれでよろしいのですか？」

彼女はそれで良いのだろうか？

本当なら、彼女は兄と結婚するはずだった。

けれど、人質としてここにいることになるということになれば、それは難くなる。

兄は王都で近衛を指揮しなければならぬ。

まあ、王族の婚姻というものは、単なる儀式でしかないから、それでもかまわないが、まったく会わないというわけにもいかない。次世代を担う子供を作らなくてはならない。

けれど、これでは会うこともままならなく、子供を作るなんてことは到底不可能。

まあ、それ以前に彼女の気持ちはどうなのか。そういう意味合いで聞いたのだが。

「そういう、ミハエル。貴方はどうなの？」

けれど、逆に、質問を質問で返されてしまった。まったく意味が分からない。

どういう意図でそういう問いかけをされたのか。

「貴方はどうなの？私の夫になることに対しては」

それが分からず、だからといって聞き返すことも、ましてや答えることもできず、考え込んでいると、彼女が付け加えた。

けれど、それは・・・

はつきり言って、余計意味が分からなかった。

僕が彼女の夫になる??

それはつまり、僕と彼女が結婚する。

そういうことなのだろう。

けれど、それは現実に考えておかしすぎる。

実際、彼女は、僕の兄と結婚する。

そう決まっていたはずだ。

けれど、思い出す。

彼女が人質であることを。

そして、今の自分の立場を。

それを思い出すと、ため息がこぼれた。

彼女がいぶかしげな顔をした。

けれど、それぐらいいないとやっていけなかった。

これはつまり、たんなる、政略結婚。

国が紅眼の一族を裏切らない。

その証として、彼女を代表者である僕のところ嫁がせる。

国としては彼女を切り捨てられない。

唯一の王位継承者であるからだ。

そして、それを一族に嫁がせるという形で預けることで、お互いの同盟を正当なものに仕立て上げたのだ。

決してどっちも裏切れないように。

そう、国が彼女を捨てられないように、一族も彼女を捨てられない。代表者の妻。

それを捨てることはできない。

切り捨てることは許されていない。

お互いがお互いに枷をつける。

そういうことだ。

それを知った僕は吐き気がした。

こんな婚姻最低だった。

彼女はこんなものを望んではないはずだ。

彼女が好きなのは・・・

兄のはずだから。

「私は、構いません。この里の代表者となった以上、この里の存続を考えると、断るわけにはいきませんから」

けれど、だからといって、破談にするわけにもいかなかった。

結局は、権力を持つものに、『私』は許されない。

それだけのこと。

だから、僕も彼女も受け入れなくてはならない。

例え、彼女が僕のことを愛していなかったとしても。

「そう。」

そして、その問いに彼女は満足そうにうなづく。

すでに、決心がついていたのだろう。

王族としての。

「よかった。断られでもしたら、ショックで立ち直れないところだったわ」



そんな僕の答えに彼女は、安堵の息を漏らしながらそう言う。  
まあ、王族としての勤めを果たせなかった。

そうなれば、彼女に非難が集まることはまず間違いなかった。

「せっかくのチャンスなのに、ふられてしまうなんて、あれですか  
らね」

「え？」

そう思つてのことなんだろう。

僕はそうだと思つていた。

けれど、彼女は違うみたいだ。  
チャンス。

そういったのをしっかりと聞いた。

彼女にとって、これは何かのチャンスらしい。

けれど、僕にしてみれば、やはり分からない。

こうして、僕と結婚することで何のチャンスを手に入れるというの  
だろう。

少し、それが気になった。

いや、むしろ、かなり、そういったほうが正しいだろう。

けれど、聞けるわけもなかった。

彼女は極端な秘密主義者。

答えてくれるわけがない。

それを、彼女を護衛しているときに学んだ。

だから、僕はそれをあえて無視すると

「少し疲れたので、私はそろそろ休ませてもらいます。ルナ姫もお  
眠りにつきたくなれば、好きな部屋をお使いください」

彼女にそう言うと、僕は自分の部屋へと入ろうとする。

けれど、それをそつと阻む人がいた。

もちろん、彼女だった。

何事だろう。

そう思った。

けれど、それを尋ねる前に僕の口をふさぐと

「ねえ、貴方はこの婚姻を単なる政略的なものだと思ってるかもしれない。だけど、私は違うの。私はずっと貴方が好きだった。必死になって、ひたむきに前へと進んでいた貴方が。だから、私にとつてこの婚姻は願ってもないチャンスなの。だから、せめて私の思いだけは受け取ってくれる？ 例え、貴方が私のことをなんとも思っていないかつたとしても、私は貴方が好きだし、愛してるといえる。例え、貴方が紅眼の一族だったとしても・・・」

まるで独り言のように囁いた。

けれど、僕にしてみれば青天の霹靂だった。

僕はずっと彼女が好きだったのは、兄だと思っていた。彼女があまりにも兄のことばかり語るので、そうなのだとばかり思っていた。

けれど、それが違った。

いや、もしかすると、彼女の嘘なのかもしれない。

この婚姻を確かなものとするための。

けれど、僕にとってそれはどうでもいいことだった。

それは、これから確かめればいいだけのこと。

それだけのことなんだ。

僕は彼女の腕を解くと向き合う。

いつ見ても、彼女は綺麗だった。

凜とした気高さを持つ女性。

私にとつては女神にも等しかった。

そんな人が僕の妻になる。

それは、幸せ以外なんでもなかった。

僕は、彼女の手をとると、

「私もずっと貴女のことをお慕いしておりました。ルナ姫」  
彼女の囁きに答えた。

## 後篇（後書き）

まあ、ご都合主義だろうとなんだだろうと、これで終了です。  
あと、多少おまけが残ってますが……  
それは、気が向いたら、という事でww  
ww

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0025d/>

---

紅眼の騎士

2010年10月8日14時50分発行